

代表となり、同人雑誌『四国文学』を創刊。戦後は主として『徳島新聞』『この道』『農民文学』『四国文学』などの地方新聞や同人雑誌に作品を発表し続ける。一九六五年三月、初の作品集『新しき日』を四国文学会から刊行し、同年六月に徳島新聞社賞文化賞を受賞。一九七一年五月には、第二作品集『綾の鼓』を皆美社から刊行する。一九八三年三月二十一日、徳島県の由岐町立病院にて死去。享年八十六歳。

悦田は、文学活動以外にも地域に関係する様々な要職に任じている。『由岐町史・上巻(地域編)』(前掲)を参考して主なものを挙げると、三岐田町町議会議員(一九四二・五・二一選挙、四年任期)、三岐田開拓農業協同組合組合長(一九五二)退任日未詳)、固定資産評価審査委員(一九五二・一二・八)一九六四・三・三〇)、農業委員会委員(一九五四、任期三年)、教育委員会委員(一九五六・一〇・一)一九六〇・九・三〇)、文化財保護審議委員会委員(一九六九・四)一九七六・三。一九七二・四)一九七六・三の間は委員長)等である。

森本嘉文「農民作家・悦田喜和雄氏逝く」(『由岐町史・下巻(図説・通史編)』前掲)は、「昭和二十六年四月発行の「三岐田町公民館報」の創刊号に「私は学者でなく一介の百姓である、この百姓の私から一歩歩み出して脱線である」と書かれており、小説家としてより、百姓

として生きて行こうとして、農業に取り組まれていたことがうかがえる」と述べているが、悦田の文学活動はこうした地域での生活や活動と切り離して捉えることはできない。

悦田の経歴について確認した上で、次に、悦田の投書家時代について、これまでに判明している事柄をまとめてみたい。

悦田喜和雄が若いころに投書に励んでいた事実は、彼の原稿に基づいて作成された「悦田喜和雄略年譜」(前掲)に、「大正六年(一九一七)／この頃より、『文章世界』など当時流行の投書雑誌に散文を投稿、しばしば登載する。」とあることによって知ることができる。また、当時、『文章世界』の選者を務めていた加能作次郎にも、「先年「新小説」や「中央公論」などに、「新しき日」その他の異色のある農民小説を出して有名となり、つい最近にも、「経済往来」に小説を書いてゐた悦田喜和雄君も、また当時の投書家だつた。」との証言がある。

「新しき村」で悦田と交誼を結んだ作家の葦山圭介は、「悦田喜和雄といふ名を僕が知ったのは、「文章世界」の投書欄だった。悦田さんはそのころ『文章世界』の投書家の常連ではなかったかと思う。」と回想しており、これによれば、悦田は『文章世界』の投書家として、一読者に名を記憶されるほどの常連であったようである。

悦田の投書家時代の経験については、彼の晩年の作品「百姓は死んだ」〔『徳島新聞』夕刊、一九七一・四・二四（八・一六）〕によっても、そのあらましをうかがうことができる。

それにしても文章世界に投書してある木賃宿の朝と、婦人公論に女の名で投書してある、小夜子さんの失敗と私の悲しみである。木賃宿の朝というのは叔父の忠吉と杉山を見て泊まった木賃宿の朝の情景であるが、婦人公論の小夜子さんの失敗と私の悲しみというのは短編小説ともいい得る告白文である。二つとも自信を持って雑誌の来るのを待っている。何度も古い雑誌を出して他の当選している人のもとと見くらべて考えても確実に、二つは当選するとうとうぬぼれはもっていた。

元吉は喜んで下の道へ降りて行った。そして分厚い重量感のする雑誌をもらった。そして急いで包み紙の表皮を破った。新しいインキのにおいと、新しい紙のにおいがかぐと、元吉はそのにおいに酔って、心からうきうきして来た。初めにめくり当てたのは投書欄であった。

—— あった！ 思わず声が出た。第一等に木賃宿

の朝を見つけた。それだけで目はくらみ、胸はどきどきおどって何も見えなかった。（中略）選評はどうか。一段おとして、小さい活字で——素朴な筆で、山の中の木賃宿の情景が目で見えるように書いている。見事だ！ とある。

「百姓は死んだ」は自伝的要素を色濃く持つ作品であるが、この作品によれば、悦田は「木賃宿の朝」を『文章世界』に、「小夜子さんの失敗と私の悲しみ」を「女の名」で『婦人公論』に投書していたという。

こうした記述が知られているにもかかわらず、悦田の投書家時代の実態については、これまでよく分からなかった。悦田に師事し、悦田喜和雄研究をリードしてきた佃實夫も、その投書については、「実は、『文章世界』その他の投書雑誌における悦田喜和雄の文章を、私は横山春陽所蔵本で最近読んだ。」と述べるにとどまる。また、悦田喜和雄の評伝をまとめた後藤公丸も、資料へのアクセスの限界から、投書家時代の活動については明言を避けている。

そこで、本稿では、『文章世界』と『婦人公論』の調査を行い、悦田喜和雄の投書活動の様子について明らかにする。さらに、悦田の投書を紹介することで、資料へのアクセスの制約を緩和し、悦田喜和雄の文学活動を再

評価するための足がかりとしたい。

二

まず『文章世界』と『婦人公論』に現れる悦田の投書の一覧を以下に示す。「□」は選評内でのみ作品が言及されたもの、「■」は誌面に本文が掲載されたものを指す。「【】内には『文章世界』のジャンル区分を示した。

『文章世界』では、一九一九年三月に募集ジャンルの再編が行われ、従来の「散文」「書簡」「短文」のジャンル区分が統合されて、「小品」ジャンルが新設された。一九一八年十一月の「暴風雨の夜」は「散文」の区分であるが、これは後の「小品」に相当すると考えられる。また、選評のある投書については『評』として該当部分を引用し、末尾に選者と選評タイトルを示した。ただし、作品名のみを掲出した選評については引用を省略した。

□ 一九一八・一一 「暴風雨の夜」『文章世界』【散文】

『評』「悦田喜和雄君(徳島)の『暴風雨の夜』は、描写が多少表面的なのが難だが、素朴な感じのいゝ作だった。地方色もよくあらはれて居た。」(加能作次郎「選後に」)

■ 一九一九・五 「木賃宿の朝」『文章世界』【小品】

『評』「思いきつて投書規則を改正した最初の月で、如

何かしらと案じてゐたが、非常に成績がよかつたので嬉しかつた。数から言つても今迄の散文書簡短文を合せた位集り、佳い作もかなり多かつたが、殊に「お弁当」「木賃宿の朝」等の傑れた作を見出した時の喜びはまた格別であつた。(中略)悦田君の『木賃宿の朝』もいゝ作だ。材料がいゝばかりでなく、観察が中々行き届いて居り、描写も巧みである。木賃宿の空気や情景がよく出てゐる。老人もよく書けてゐるが、後半、女が葉を貰ひに来る所などもよかつた。」(加能作次郎「募集小品を読んで」)

□ 一九一九・六 「貰ひ風呂」『文章世界』【小品】

『評』「悦田喜和雄君の『貰ひ風呂』は前月の木賃宿に比べると落ちるが、ごた／＼した事柄を手際よく描く手腕には感服する。」(加能作次郎「募集小品選評」)

□ 一九一九・七 「肺らしき病氣にかゝつて」『文章世界』【小品】。選評は加能作次郎「小品の選後に」

□ 一九一九・九 「戦慄」『文章世界』【小品】

『評』「悦田喜和雄君の『戦慄』はある物凄い夢を書いたものだがそれが単なる夢とは思はないやうな真実さと、人にせまる力があつた。そしてあんな夢を見ることによつて、その人の精神状態も想像

された。只だ作者がそれを意識してゐないので只だ夢を夢として書いたのが物足らなかつた。併し此の人の書くものにはいつも独特の或る鋭さがある。(加能作次郎「小品選評」)

□ 一九一九・一〇 「川」『文章世界』【小品】

《評》「悦田喜和雄君の『川』はいつもの素直さで観察したまゝを表現してゐるが、もつと凝視がほしい。(岡田三郎「小品選評」)

■ 一九一九・一一 「私の生活」『文章世界』【小品】

《評》「悦田喜和雄君の『私の生活』は例によつて、簡潔な筆で辛勞の生活をよく描いてゐる。かなりな作である。(加能作次郎「小品選評」)

■ 一九二〇・一 「夕飯」『文章世界』【小品】

《評》「悦田喜和雄君の『夕飯』はかなり深い君の人間性をありのままに披瀝した作で、いいものだと思う。親子兄弟等が食欲を中心として相争つてゐる浅間しさ、そしてその浅間しさの底に隠れてゐる君の博い心が何よりも尊い。(加能作次郎「小品選評」)

□ 一九二〇・三 「私」『文章世界』【小説】。選評は中

村星湖「応募小説に就いて」

□ 一九二〇・三 「彼の場合」『文章世界』【小品】。選

評は加能作次郎「小品選評」

□ 一九二〇・四 「村の京やん」『文章世界』【小説】

《評》「悦田君といふ人はこの頃現はれた人だが、不思議な人だ。非常に無邪気で、非常に真率だ。これでぐんぐ伸びて行つたならばと思ふ。(中村星湖「応募小説に就いて」)

□ 一九二〇・四 「父の病」『文章世界』【小品】

《評》「悦田喜和雄君の『父の病』では例の如く乱雑な書き方をしてあるが、素朴で鋭いところがあつて、不思議に読者の心にせまるものがある。(加能作次郎「小品の選後に」)

□ 一九二〇・五 「冷い風」『文章世界』【小説】

《評》「悦田君はやすくその本領を發揮しつつある。文章にもすこし神経を働かせてほしい。(中村星湖「応募小説に就いて」)

■ 一九二〇・七 「私とドングリ」『文章世界』【小品】

《評》「悦田君の作、村野君の作、水戸君の作、武永君の作その他数篇の如きは、それ／＼立派なものであつた。悦田君の『私とドングリ』は中でもよかつた。不相変誤字や語句法の間違があり、方言が沢山に交つて居て読みづらくはあつたが、「私」の気持も茶屋の婆さんの気持もよく出て居た(。『広い人生の一角が髻髷として居た。私は涙ぐみさへした。』(加能作次郎「小品選評」)

□ 一九二〇・七 「働く者の喜び」『文章世界』【小説】

《評》「悦田君の『働く者の喜び』は、作者の神経の鋭さを窺はせるに足りる。」(中村星湖「応募小説について」)

□ 一九二〇・八 「暗き家」『文章世界』【小説】。選評は中村星湖「特別募集小説に就いて」

■ 一九二〇・九 「村の京ちゃん」『文章世界』【小品】

《評》「悦田喜和雄君の『村の京ちゃん』はおどけたなかにしみじみした人間味のあるいゝ作だ。京ちゃんの面目がよく現はれてゐる。」(岡田三郎「小品選評」)

□ 一九二〇・一一 「恋人」『文章世界』【小説】

《評》「悦田喜和雄君の『恋人』は、恋といふ可くあまりに粗野な、田舎の若い男女の情交を取扱つたもので、例によつて、正直に着けてゐるが、余程露骨過ぎる点もあるので、この儘では到底発表する事は出来ない。」(中村星湖「応募小説に就いて」)

■ 一九二一・一〇 「私の懺悔と憐れな文字さん」『婦人公論』

悦田喜和雄の名が『文章世界』に初めて現れるのは一九一八年十一月である。先に引用した通り「悦田喜和雄略年譜」には一九一七年頃から投書を開始したとあるの

で、この年譜を事実とすると一年から二年程度の落選期間があったことになる。

悦田の投書は、「木賃宿の朝」に対する激賞を契機として頻繁に『文章世界』に取り上げられることになるが、それは当時「散文」「小品」の選者を担当していた加能作次郎の興趣に適っていたからという側面もあるう。例えば、加能は次のように投書家に呼びかけている。

諸君は従来と異るところなく、真面目に熱心に、独自の境地を開拓して行かれんことを望むのみです。模倣や当て込みなどなしに、只管に自己を生かし、自己の芸術を創りあげるといふ気持で、態度で、作品を送つて貰ひたいのです。「散文」の選を受持つて『文章世界』一九一八・一)

全体を見渡したところ、無理に六かしい言葉使ひや言ひ廻しをして、意味の深長を銜はんとする者が多い様だ()。これは文章修練に当り、誰でも一度は踏む路筋であるが、そして同感もされるが、その弊に深くはまり込んで行かない様にお互に注意せねばならぬ。文章は決して疎かにすべきではないが、それは決して矯飾を意味するのではない。主なのは内容だ、吾々は先づ何よりも字句の上の虚飾や銜気を捨

て、端的に卒直に内容を表現し生ずことを心掛けばならぬ。(「選後に」『文章世界』一九一八・二)

ここに見られるように、加能が投書家に求めていることは、「模倣や当て込み」ではなく「自己を生か」すことであり、また、「虚飾や銜気」ではなく「端的に卒直に内容を表現」することである。悦田の投書に対する加能の選評には「観察が中々行き届いて」、「簡潔な筆で辛労の生活をよく描いてゐる」、「人間性をありのままに披瀝」、「素朴で鋭いところ」といった表現が見られるが、これらは加能の求めた基準に悦田の投書がうまく適っていたことを示している。岡田三郎が「もつと凝視がほしい」と述べ、中村星湖が「文章にもすこし神経を働かせてほしい」と注文を付けたことと比べると、加能の肩の入れようは際立っている。

さて、『文章世界』に掲載された悦田の投書を並べてみると、悦田が様々な表現を試みていた様子が見えてくる。「木賃宿の朝」は、「私」が起きてから宿を出発するまでの短い時間に生じた出来事を、老人と宿の主人や魚屋連中とのやり取り、若い女と薬屋とのやり取りという二つの山場を設けつつ、時系列に沿って記された作品である。「私」は基本的に観察者の位置を守っている。

「私の生活」は、「私」の日常生活の様子に焦点が当て

られ、「私」の思考や心情をともなった表現が実践されている。特に「汗に濡れて働いて居る者」と「扇風機を後にして座つてゐる人々」との対比を明示することで「辛労の生活」(加能作次郎「小品選評」前掲)を描き出すとともに、「又いつの間にか朝になつて居る」という表現によって、そうした生活が反復されるものであることが示されている。この作品における「私」は、身の回りの出来事を観察するだけではなく、自らの生活に対する省察的なまなざしを有していると言えよう。

「夕飯」では、三人称の表現が試みられている。「京次」の家の夕飯時のやり取りが、母、京次、秋太、二人の妹、父のそれぞれの行動を中心に描き出されている。そのことによって、「親子兄弟等が食欲を中心として相争つてゐる浅間しさ」(加能作次郎「小品選評」前掲)が、それぞれの人物の行動が他の人物の反応を引き起こしていくという関係性の劇として描き出されることになる。「私とドングリ」では、「私」を語り手とした一人称が採用されている。「私」がお詣りに行くときの説明から語り始められ、その後「或日」の「薬師詣」の時に寄った菓子屋でのやり取りが語られ、次いで一ヶ月後に菓子屋を訪れた時のことが語られる。時間を隔てた場面を構成することによって、その間の状況の変化が描き出されることになる。

「村の京ちゃん」は、「私」を語り手としてはいるが、描かれる対象として中心化されているのは「京ちゃん」である。「京ちゃん」は、村の「人々」から「京ちゃんは馬鹿だ」と言われたり、「子供達」からも「馬鹿よ、京ちゃんよ、馬鹿よ」と声を揃えられたりする。しかし、末尾に記された「近頃の女は(中略)若い男やお金がありさへすれば幸福なんだよ。(中略)俺などは馬鹿だ、かうして本ばかり読んでるさへすればよいのだ。しかし俺はそれで幸福なものだ。俺かう思ふ——凡ての人間は物を考へる時は幸福だと、それでかう本を読んでは色々の事を考へるのだ……俺はやはり馬鹿だ。」という「京ちゃん」の言葉によって、彼女の人生観が示されるとともに、「馬鹿」の意味が問い直されることになる。

「私の懺悔と憐れな文子さん」では、「私の告白」という形式が用いられているが、ここでの「私」は女性である。そして時間の推移も、「十六の秋」から「十七の冬」、「三月のお節句頃」を経て「百姓の田の方が忙しくなる頃」まで、長い期間が取られている。そこでいくつかの場面が重なることにより、「私」と「文子さん」との関係の変化が描かれることになる。女性の語り手を採用したり、友情と嫉妬との葛藤が描かれたりと、創作への意欲が現れた作品であると言えよう。

悦田の文学的軌跡をたどる上で、投書家時代の多彩で

果敢な試みを無視することは出来ない。

後年のことであるが、悦田は中央の文壇雑誌に作品を発表していた頃のことを小説化して、以下のように書いている。

若い時、私淑していた先生の紹介で、ある雑誌に何度か発表をしていると、其の頃有名だった批評家に、柳の下には常住泥鰌はいないぞ、いつも同じことばかり書いて！ と非難されたことがあった。書くことは違っているのだが、つづけて百姓の汚ない生活を書いていたので同じことのように読んだのだろう。都市の綺麗な生活を書いて言たって、知らないで書けない。虚構と云って、何かたよるべき真実がないと書けようはずがない。(『文学青年』『四国文学』一九六六・一〇)

「つづけて百姓の汚ない生活を書いていた」主人公に對して、ある「批評家」は「いつも同じことばかり書いて」と難じる。しかし、「自分」では「書くことは違っている」と思っているであり、結句彼は思い悩んで「私淑している師」に手紙をしたためる。

この一節は、悦田の投書家時代について書かれたものではないが、彼の投書について考える際にも示唆を与え

てくれる。本稿で紹介した投書を見ても、農村生活をモチーフとしたものが多いことは一目して明らかであり、その点で「同じこと」ばかりが書かれていると言うこともできる。しかし、それぞれの作品では視点や焦点化された人物、あるいは作品構成など、様々な変化が模索されている。それは、自己や周囲の世界に対する関心の領野と視角との変化を表現しているとも言えよう。悦田の投書家時代の當為を明らかにすることは、彼が地域に根ざして小説を書き続けたことの意味を考えるためにも、欠くことの出来ない作業であると思われる。

『文章世界』の文章観との関係や、武者小路実篤、水野葉舟、田山花袋などの悦田が影響を受けた文学者との関係など、投書家時代に限っても今後明らかにすべき課題は多い。それらについては別稿で検討することとし、以下では悦田の投書を紹介することにしたい。

三

以下においては、悦田の投書を紹介する。紹介にあたって、本文表記は、句読点、符号、仮名遣い、送り仮名、改行など、基本的に原文に従った。ただし、誤記や脱落と思われるものは、稿者の判断によって補訂し〔 〕内に示した。漢字表記については、原則として現在通行の字体に改めた。判読不能の文字については「□」で示した。

・悦田喜和雄「木賃宿の朝」『文章世界』一九一九・五

八畳位の一室に六つの寢床がこさへられて、そこに皆が寝た。

昨夜音がしてゐた雨は朝になると止んでゐた。

私が起きて来た時魚屋連は荷造をして、かついで行つたらよいやうにして、炉のはたに寄つてゐた。昨夜ちり鍋で酒の爛をした老人は、土間におりて、「やれ／＼：：やれ／＼」と云ひながら、自分の荷の、菓子箱を棒にく／＼つてゐた。

私が顔を洗つて来た時老人はれいのちり鍋で酒の爛をしながら、「やれ：：やれ」と、云つて其酒の中へ大根をおろし込んでゐた。

「爺さん！ 大根入れたらよいかい。」この主人は笑ひ／＼云つた。

「エ、そりや酒がきつうなります。」

「……………」

「あゝ：：やれ／＼、そりやきつうなります。」しばらくして又かう云つた。皆は一同に笑つた。

「爺さん誰に云ひよんぜ。」一人の魚屋は云つた。

「わしやアちり鍋に云うてをる。」皆は笑つた。

棚に上げてあつた飯桶を、皆はめい／＼におろした。膳はよんべから飯桶の上に置いてあるのですぐに喰ふ事が出来る。

私は始めてどあつたから、夜飯がすむと、主人が戸棚に入れて、つまえて呉れてあつた。

夜飯には豆腐が一きれと、豆のおかずであつたが、朝は味噌のみついてゐた。

「味噌温めりや、味噌焼もあります。」主人は云つて呉れた。

「へい！」と云つたが私は焼かなかつた。

「お早やうございます。」といつて若い女が這つて来た。かむつた手拭の前を少しかき上げて、頭を下げた。

「あの香地さん、お葉すこしさへて呉れんで。」

「あゝさうで。」頭の禿げた葉屋は茶を入れた飯をざぶざぶかき込んだ。

「どないにお悪で。」と葉屋は歯をほじくりながら立つて問ふた。

「あの……」彼女はすこし考へて、「昨日……をとゝひまで学校へ行きよつたんで、つい其日の夕方から頭が痛む云ひ出して。」葉屋は少し頭をかたむけて考るやうにして、女の顔を見てゐたが、やがて、すぐ隣の別室に這入つた。そこは調剤室か、薬を交せる音がかちかち云ひ

出した。

「三日分にしませうか。」と葉屋は障子の内から云つた。「エ……」と云つたなり女は顔を戸口の方にふつて、「いつそ二日分でよろしい。」と云つた。

調剤所の障子は開いた。禿の葉屋は、紙袋の口を折りながら出て来た。

「これな？ 一日に三度に吞ましなさい、朝と昼と晩——水でも白湯でも吞ましなさい、病気のかげんはしてあるでよ。」

「今吞ましてもかんまんで。」

「帰つたらすぐ吞ましなさい。」

「ほんならもろて帰ります。」彼女はかう云ひ捨てるとすぐ帰つた。

他の者は皆飯をすましてゐた。葉屋は一人炉のはたによつて飯をはじめた。

皆はもう立つ用意をした。私は一番さきに仕度が出来てこゝを出た。

・悦田喜和雄「私の生活」『文章世界』一九一九・一一

追ひ着かう追ひ着かうとあせつて、やうやく四五人の休んで居るのを見て、一層馬力を掛け走つてやつと行つ

た。皆は私の方へ眼を向けて『早いなア』と云つた。

私はドサリ荷を置くと何時もの口癖の『あゝえらい／＼』と云つて襦袢のぼたんをばづして汗を拭いた。知らず／＼又『えらい／＼』と云つた。

棒を尻に敷て、しやごむと帽子をとつて、扇子のかはりに胸をパタ／＼たゝいた。

『お前等何荷ぜ』と云つて私は帽子の汗を嗅で見て又冠つた。

まだ高くない大陽は座つてゐても帽子の下に射し込んで来る。

私はかう汗に溺れて働いて居る者と、煽風器を後にして座つて居る人々とどれほどの差があるだらう！と考へてゐたのがまだ頭から去らなかつた。

『色がこげ、るなア……これ金持であつたら、汗を出せば色が黒くなるとか、夏は白粉をつけんとか色がこげるとつとんどぢやもんなア！』と私は或る婦人雑誌にあつた事を思ひ出して云つた。

『喜和さん色が白いよつてなア！』と若い五人の一番前になつた女は云つた。私に日は焼けて黒くなつた自分の顔を今見るやうに思つて恥かしいやうな気がした。

『俺色がこげ、るよつてひげ一杯生しとんぜ！』私は色の黒くなるのやかし気にせないと云ひたい気がしてかう云つて頬を逆に撫でた。ざら／＼して顎から頬にひげの

一杯生えたのを感じた。

『白粉皆が組で一俵位買つとかないか。』

『汗で落ちたらつけ／＼したらえなア！』

『厘出（一貫何厘で薪を運ぶをいふ）位でなか／＼買へんわ！』

『白粉どころかハハ、ハ、』

『お前等朝早いなア。』

私はまだ寝てゐた時分『皆行きよるぞ。』と母が云つて呉れてから起きて来たのだから、二荷目だとは知つてゐたからかう云つた。

『お前ゆうべ遅まで出しよつたんどぢやな』と私に一番近い女は私に云つた。

『朝遅いよつてなア——俺朝よう起きんよつて。』

『よう草臥るなア厘出は。』

『而してなか／＼米一升にならんア……升儲けて一升喰うて、雨の日は喰はずに居らんならん！』

『ほんまよ！』こんな話をして又立つて走るのである。

七八町奥の山の麓から町の新聞屋まで、一日に十荷位出すのである。正午飯までに四荷して、まひるは二荷、又八つ茶から四荷走つて一荷八錢位とれる。一日あせつて八拾錢である。

私は夕方皆が止めてからまだ一荷走つて十荷にたすのである。十荷目問屋へ行くと問屋の主人はもうはでな浴

衣を着て店で煙草をふかして居る。

日が暮れて涼しくなると、ガツタリしてしまつてじく／＼頭が痛むやうに思ふ。襦袢のポケットに手を突込で歩くところか楽なやうな気がする。そしてポケットの中の銅貨や銀貨をいじりながら家に帰ると、いつものやうに皆は待つて居るのである。

夜飯がすむと炉の端になるといつの間にか眠入つてしまふ。母に起されて、鼻のさきと足を洗つて寝間に這入る。又いつの間にか朝になつて居る。

・悦田喜和雄「夕飯」『文章世界』一九二〇・一

母と京次と其弟と三人が田から帰ると、小さい妹二人と、ぜんそくでヒュー／＼云つて居る父は炉を囲んでゐた。

『諸が出来とるぞ』父は顎で知らす様にして云つた。竈を見ると、諸の山盛入つた釜から白い湯気が立ち昇つてゐた。京次等兄弟は競合つて諸をつかんで来た。弟は竈の前の腰掛に腰を掛けた。兄は諸を食ひつつ土間から炉の間に腰を掛けた。母は忙しさに馬に水をやつては又、水をさげて這入つて来る、と、『京次足洗はんのか！』と、言つた。

『ウ……ウ』と彼は諸を嚙りながら云つた。

『早う洗へ』

『秋さき洗へ』

『ウ？ ウン兄や洗へ』とはねかけ合つた。

『ほんなら俺さき洗ふは。』母は怒るやうに云つて湯を取つた。

母が洗つて来ると、弟も炉の間に腰を掛けた。母は炉の傍の戸棚から二人の膳を出してあたへた。

『ア——ほんにすしがあらんぢや。』と母は腰を延ばして座つたままで上の戸棚を開けた。中から藁のすぼけを出した。弟の秋太は手を延ばして、母の今出したすぼけを、ひつたくつた。

『ウチに？』と、一番下の妹が泣き声になつて秋太を追つて土間に下りて来た。

『ウチにも？』と姉も立つて来た。

『われ？ すしすかんのないか。』と云つて秋太は、額で睨むだが、妹等は泣くやうに云つて手を出した。秋太はすぼけを振り上げてなぐる真似をした。

『秋……秋の命長(いのちなご)のすぼけやかしてなぐるもんでない。』といつて母は睨みつけると、秋太は笑ひ／＼すぼけを開けて、中のすしをつまみ出した。妹等二人は泣き声になつて手を出してゐた。

傍にゐた京次は、だまし手に秋太のすぼけをひつたく

つた。そして笑ひ／＼すしをつまみ出した。

『よう／＼呉れよう?』と、妹等は又京次の方へ手を出してゐた。

京次はみしや／＼つまんでやり出した。

『大けな者はかりがなんなア：ちとやれ：：うちは大けな奴が大人しくないんぢや、(なほ大声を張上げて)大けな者がなんなア：：』と云つた父の苦い顔、眼玉がクル／＼廻つた。

『皆ちとわて、分けて戴け。』と云つて母は京次の方へ手を延ばして行つた。京次は妹等に分けてやると、母の手にも入れてやつた。母はそれを口に入れると、又手を出していつて、『父にもぢや。』と云つた。京次が入れてやると、母は父にやつた。

すぼけは又、秋太がひつたくつて行つた。

・悦田喜和雄「私とドングリ」『文章世界』一九二〇・七

私は何処へお詣に行くのでも其日帰られる所であれば何時でも尻切れの仕事着物の新しいのを着て行くのである。なぜなれば石のやうに固くなつた、短い首に着物の衿も羽織の衿も巻きつけたやうにしてまるで着物と体軀とを別なやうに、ふぐつに歩く、何百人の人中にもゐても

選り出せるやうな風采になるのを知つてゐるから。それに穿物でも本職のした買ひ下駄か麻裏位でないとそぐはない、尻切着物には角草履（かどくろ）に山行の帽子でよく似つく。

近頃何物によらず値が高いからお弁当はもたないことにしてゐる。お弁当を持つと、菜を買はねばならん、それより其菜代の十銭か十二銭で菓子を買つてそれを食ひつゝ歩く、さうすると道も割合楽に歩かれるし時間を費さないから。

或日私は薬師詣に行つた。一時頃までに帰られる(。)
そして、春の天気だからと思つて、朝から雨らしかつたが、雨用意なしに行つた。お詣でして下の町まで来た時降り出して来た。其長い町を中頃まで来ると、町はしつぽり濡れてしまつて草履では歩かれない位になつた。私は小供傘を一つ買つた。丁度妹が傘がないと云つてゐたから学校行の傘にと思つて。

私は頭だけしか入らない傘で長い町をピチャ／＼歩いた。私は来ると何時でも菓子を買ふ、夏など山桃を売りに来ても何時でも休む、婆さんと爺さんの二人暮しの家によつた。婆さんと爺さんは小さい炉を囲んで昼飯をやつてゐた。

『今、河本のたいせうがお帰つたのになア! もう少し早かつたら! 今森の処位行くだらう?』と戎さんのやうな爺さんは舌をあまり動かさずに云つた。

『爺さんちやもう大谷の一軒家のあるあたり位行くぜ!』と人のよい婆さんは、いつもの垢抜のした顔をやゝ赤くして、爺さんを睨むやうにして云つた。すると又爺さんは、

『あしこまでにしてもあの人田井の店へよるのつてその間に追ひ付くよ。』と云つて大きな片きれの香の物を挟み上げて、一口にほをばつて、茶を掛けた茶碗の飯をカチ／＼箸でつゝきながら頬肉をしきりに動かしてゐた。

『お婆さん、お邪魔ぢやけんども、菓子少し呉れるけエ』と云つて私は菓子を飾つてある店先へ出て行つた。婆さんも私について来た。七つ八つ菓子入の硝子蓋のものがあるが、菓子の入つたのはたつた二つしかない、一つは煎餅と一つは飴で拵へた丸いドングリが十ほど入つて。

其外に蜜柑が少しあつた。私は又貧乏したなアと思つた。私はドングリの入つた入器の蓋を開けた。婆さんはじつと覗てゐた。

『これ何程ぜ?』

『一つ一錢よ。』

『ほんならこれ貰ふぜ。』と云つて私は六つ取つて婆さんに見せた。

『これほんなら婆さん』と私は三錢渡した。『これ食べんせ。』と云つて婆さんは煎餅を一つとつて呉れた。私は菓子を懐に入れてそこを出た。雨が烈しくなつてもう

草履では歩かれなくなつたから草履を捨て、歩いた。

阪にかゝつてから私は菓子を食ひかけた。飴製のドングリは雨氣に解けかゝつて懐にかみついてゐた。(「齒にへばり付てなか／＼とれなかつたりした。私は三つ食つてやうやく勘付た。しまつた、後返りしやうか? 河本の大將に逢つたらこの話をして、三錢渡して置かうか? 婆さんは知つて居るか? 知つたら云ひさうなものなのに? あの氣のよい婆さんだから知つて黙つてゐたのかも知れん——後返りしやうかと思つて暫時立つてゐたが雨は益々烈しいので止めた。卸屋へ菓子代が払へないからあの通り菓子が切れたのだとは思つたが三錢位ゐるが其払ひのたしにもなるまいと思つたので、つゞけて歩いた。私は一ヶ月ほどして又行つた。婆さんの店は戸がしまつて戸口が一枚障子であつた。これは? と思つたが私は何時ものやうに這入つて行つた。『お婆さん居るけ?』と云つたが音がしない、炉の方へ行くと、婆さんは布団の中から頭を出して何か焚いてゐた。

『婆さんどうしたんぜ?』と云つて私は問うた。婆さんは青い顔を上げた。私は子なしやかしはこれだとすぐ思つた。死ぬわいと思つた。

『婆さんこれぜんに菓子をよけ貰つとつたんぜ!』と私が云ふと、

『爺さん死んだんぜ!』と云つて私の顔をジロ／＼見

た。『これ婆さん間違つて三銭のだけよけ貰らつとつたんぜ』と云つて五銭白銅を一枚出した。『これほんならつり』と云つて、其辺を探るやうにする。『婆さんつりいらんぜ……あいらしいよ婆さん』と云つて私は逃げやうとした。

『あれ!! ありがたい!!』と云つて婆さんは涙の一杯の眼で私を見てゐた。

・悦田喜和雄「村の京ちゃん」『文章世界』一九二〇・九

京ちゃんの家は村では、一二の顔で、どこへ出てても恥かしからぬ百姓である。父は村会議員でもある〔。〕それに京ちゃんは三十二でまだ独身である。京ちゃんの友達には子の三人も出来て居る男も、すぐ隣家にある。人々は京ちゃんの独身を不思議がつて居るのである。京ちゃんは馬鹿だとか、お道具が駄目なのだとか云つてゐる。しかし、それは悪口である〔。〕お道具はどうか私は知らんが、たしかに馬鹿ではない。何時でも本を懐に入れて、道を歩きつゝ読んだり休むとすぐ懐から出して読むのである。其本は心理学や哲学の本である。

朝京ちゃんが仕事に出て行く時丁度学校行の子供等に逢ふと、京ちゃんは『ウハア』と云つて子供達にびつこ

りさせたり、『ア痛! ア痛!』と云ひながら頬をつめつたりする。子供達は、『つめりよ!』と呼んだり、『京ちゃんよ!』と呼んで逃げるやうに京ちゃんのそばを走つて通る。子供達は京ちゃんを自分の友達のやうにしてゐる。

或日私は田へ石灰を振つてゐた。と、すぐ隣田へ京ちゃんを除草器を持つて、本を読みながら田草取に来た〔。〕丁度正午飯を食つて出て来た所なので、学校の子供が一町ほど北の道を家に帰る所であつた。一人が見付て、『京ちゃんよ!』と叫ぶと皆が口々に『京ちゃんよ! 京ちゃんよ!』と呼ぶ。京ちゃんは『ぎや! ぎや!』と一人一人に答へる。

「喜和さんよ、だうじよが居つたら呉れよ」

「エエ——これ湿さにや飛んで仕様がないでなア」石灰が煙のやうになつて風に飛ぶのでかう云つた。

「俺所の田もよく出来るは、石灰が来て、」京ちゃんは私の田から飛んで行く石灰に逃げるやうにして草を取つてゐた。

「京ちゃんよ! 京ちゃんよ!」又子供の一群が通りだした。

「オーイー」京ちゃんは手招きしながら『大きな鰻ぢや、来い!』と呼んで置で、田から出て私の傍に来た。

「早色が變つて居るかのう!」と云つて石灰汁に酔つ

た、どうじよが、ぼちや、云つてはねて居るのを見てゐた。

「ほん——とか？」と云つて子供等は私等二人の方へ向いて細い田の畦を走つて来る。

「ほら——こんなぢや！」と京ちゃんは両腕を開けて、五尺もあるやうな形をして見せた。先になつて走る子もあれば『うそんないか？ うそんないか』と云つて前の者につれて走つて来る子もある。

第一着に來た眼のクリ／＼した子は辺をキロ／＼覗いて『があきや、うそんないか、うそんないか？』と云つて京ちゃんに攫み付て行つた。京ちゃんは、た／＼しながら小さい右手を捕へた。其子は又不器用に左の手で打つてかゝつた。

「をどれ！」と京ちゃんは小供声に紛して、其子の左右の手を左の手で一掴みに掴んでしまつたと思ふと、腰をかゞめて、田の畦に出て來て死にかゝつた。どうじよをつまみ出して『食べ——食べエ』とやはり子供声で其子の口に押込むやうにする。其子は顔を振つてそれを避けやうとする。

「俺等こんなもんだ——こら」子供が脛の下から京ちゃんのするのを覗て居ると、京ちゃんは大きな口を開いて、どうじよを押込んで行つたと思ふとすぐ引き出した。子供は振切つて逃げてしまつた。

後から來た子供達も田の周をくる／＼廻つてゐたがやがて上の川堤なほづみに走り上ると、

「馬鹿よ、京ちゃんよ、馬鹿よ、」声を揃へて奥へ走つて行つた。

私が石灰を振つてしまつて、『京ちゃん？ もう正午だらうげ？ 帰らんけエ——』と誘つてみた。京ちゃんは『おい』と云つて田から出て足を洗つて私といつしよに川堤に上つた。

京ちゃんは金文字の入つた小形の本を懐から出して読みつゝ歩く。私は黙つて京ちゃんの後をとぼとぼついて行つた。田から私や京ちゃんの家までは十町余もあるのである。

京ちゃんはふと本から目はずして、

「喜和さんよ、近頃の女はお金と若い男が一番大切なのだぞ、そして若い男やお金がありさへすれば幸福なんだよ。君も精出してお金をこしらへる考をせにな駄目だぞ、俺などは馬鹿だ、かうして本ばかり読んでゐさへすればよいのだ。しかし俺はそれで幸福なものだ。俺かう思ふ——凡て人間は物を考へる時は幸福だと、それでかう本を読んで色々の事を考へるのだ……俺はやはり馬鹿だ。」かう云つてさも淋びしさうな顔で私の顔を見て又本に眼を据えて歩いた。

・悦田小夜子「私の懺悔と憐れな文子さん」『婦人公論』
一九二一・一〇

文子さんの失敗を書かうとすると、どうしても私の告白をも添へなければなりません。

文子さんと私は丁度同年ではあり、隣同士で、双児のやうなお友達でした。学校へ行くときでも、いつも一緒にいたり帰つた(り)してゐました。私達二人は同じく百姓であります。村では中以上の家でした。そのうちでも文子さんの家の方が、私の家より、少し田地も山も多いのです。それで文子さんの父さんは村会議員でありました。しかし、私達は高等小学校をすませたきりで百姓の仕事をしてゐました。十六の秋でありました。二人が仕事がいやになつて、休んでこんなことを話し合ひました。

『二人が姉妹になつて、一つの小屋を建て、独身で一生通さうよ。』

私の村では、私と文子さんが一番淋しい娘でありました。他の娘さんたちは、お盆でもお祭でも若い男の方と一緒になつてよく遊んでゐました。私達はそれを傍で見てる位がせきの山でありました。私等淋しい二人は翌日になると、よくその娘たちの批難をしたりしました。

文子さんもさうであつたでせう。私は淋しくてなりませんでした。それから他の娘さんは十七八になると、皆が揃つて大阪へ奉公に行きます。私や文子さんは大阪へも行かして呉れず、やはり百姓の仕事をしてゐました。それは十七の春でありました。私と文子さんとが相談して二人で家出をしようとしたことがありました。しかし、それも失敗に終わりました。もう大阪へ行けないことを覚悟せねばならなくなりました。

休日にはきつと、文子さんの家へ行くか、文子さんが私の家に来るかして遊びました。そして、私達は独身々々といつてゐました。その時分でありました。私と文子さんと二人が、文子さんの家で婦人雑誌を見てゐる処へ、文子さんのお母さんが来て、笑ひながら、『小夜ちゃん、二人がをば(独身)で一生送るの？をばにはをぢ(男の独身)がつきものだよ』と笑ひながらかう云つたことがありました。

私達は独身で一生通すと云ふのが、故意に何かに反抗したやうな気持でゐました。父母が『どこかへ嫁がないか？』と云つたら、泣きながら『私をばで居る』と云ふのでした。其実をいふと、男が欲しいといふ事でした。せう？童貞は神聖だとか云ふことを思つてゐても、神聖どころでありませんでした。淋しくて、却つて他の娘たちを見ると、羨しいくらゐでした。

今考へて見ると、私ばかりじゃなかつたでせう。文子さんにも色色の意味から随分其心が濃厚だつたと思ひます。『二人が姉妹になつて、一つの小舎で、一緒に独身で通さうよ!』と云ふことは文子さんの、モツト一のやうでした。

十七の冬でした。村へ若い巡査が来ました。その巡査が、文子さんのお父さんが、村会議員ですから、何かしら心やすくなつたのでせうが、文子さんの家へよく遊びに来てゐました。

それは休日でありました。其日は正午まで仕事をすれば、午後はお休が習慣であります。五六日前から約束して、其日は文子さんが私の家まで来られるはずにしてゐました。文子さんがあまり遅いので、私は待つ精が切れ、文子さんの家へ出かけてゆきました。もう午後三時頃でした。文子さんは例の巡査と文子さんの妹の花ちゃんと三人で雑誌を見てゐました。私が行くと、『あらさよちやん』と、文子さんは嬉しさに云ひました。それより前から私達の間にも其巡査は随分問題になつてゐました。『巡査に惜しい人』と云ふことをよく云ひました。剣をとつて歩いてゐる時、何処かの高等学校の生徒のやうでした。それに話すことが全部平民的で、快活で、男振は美男子と云ふ方でした。其頭が五分刻なので一層私達の話が高くしました。

『お上りなさい』と云つて其巡査は私の座る処を設けるやうに、少し文子さんの方へよつて呉れました。私は黙つて其中にわり込んで座りました。其時、もし私が何か云つたなれば私の声は慄えたでせう? それだけ私は嬉しかつたのです。巡査は婦人解放などについてお座なりなことを云つてゐました。私のうぶな眼や心はもう其時眩惑されてゐたのでせう? 文子さんが何かの用で、お台所の方へ行つた時巡査は私の手を握りました。私は巡査のすくまゝにまかせてゐました。巡査は握つた手に入れたたり、ぬいたりしました。私の其時の氣持は書くことは出来ません。私の心臓はだく／＼躍つて、何となく其巡査の顔を見ることが出来ませんでした。

それから文子さんと遊んでゐて、巡査が来ない時は大変淋しい氣がしました。巡査に逢ふため文子さんの家に遊びに行くといふやうになりました。しかし、逢つてもそれきり手を握るやうなことはありませんでした。しかし、文子さんとは色々關係が深くなつたのでせう? 文子さんは巡査のことをよく話しました。多くの仕事の中で巡査が一番よい、とよく云ひました。

『下宿がちゃんど、出来てゐるものは他にない』とか、『さよちゃんの弟さんなども巡査になるとよい』と話すやうになりました。

こんなことから私はやきもちを焼くやうになりました。

文子さんが今までのやうな嬉しいお友達でなくなりまして。したがって、文子さんの家へ行くことが少くなりました。

お恥かしい話ですが、文子さんと巡査の結果が悪くなるやうにと祈るやうになりました。田へ行つて文子さんに逢ふと、すぐ巡査の話が出るのが私の一番のいやくでした。お正月が来ても、私は文子さんの家へ行くのがいやでした。その内ずん／＼日がたつて、三月のお節句頃になりました。

『文子さんのお腹が大きい』といふ噂があることを母から聞きました。私は頭のしんがじん／＼慄へるのを覚えてきました。

文子さんは仕事に出るやうなことがなくなりまして。ちらと見ることがあつても、逢つて話をする事などなくなりました。

もう百姓の田の方が忙しくなる頃でありました。ふと医者が文子さんの家へ行くのを見ました。母はびつくりして見舞に行きました。

『文ちゃんが大変悪いのじやつて』と云つたのを聞いて私はびつくりしました。

木浦といふ所へかわつて行つた巡査に打電した、と云つてみました。木浦へ行つてからはがき一つ来ないが、こちらから出した手紙は全部受取るといふことを聞きま

した。文子さんの父さんは怒つて、『知らさずに置く、どこの牛の骨やら馬の骨やら知れないもの！』と云つたさうですが、お母さんが、『せめて今はのきはに』と云ふので打電したさうです。私もびつくりして見舞に行きました。もう大きな眼をして、じろ／＼私を見たきりでありました。私は思はず声を出して泣きました。

『文子さん、許して下さい！』と云つたきり後の言葉は出ませんでした。其夜とう／＼文子さんは死にました。翌日も翌翌日も巡査からは何にも便はありませんでした。私は今でもやはり文子さんを思ひ出すと、『文子さん許して下さい』と文子さんに深くわびてゐます。

【注】

(1) 悦田喜和雄については、「悦田喜和雄略年譜」(四国文学)一九六五・八、佃實夫「悦田喜和雄論」ノートⅠ—その人と作品—(『四国文学』一九六五・八)、後藤公丸『忘れられた農民作家 評伝悦田喜和雄』(二〇〇一・一二、四国文学会)、由岐町史編纂委員会編『由岐町史・上巻(地域編)』(一九八五・九、由岐町教育委員会)、同『由岐町史・下巻(図説・通史編)』(一九九四・三、由岐町教育委員会)を参照。

(2) 加能作次郎「文章世界」の投書家たち『文芸首都』一九三四・九

(3) 葦山圭介「三つ児の魂—悦田さんのこと—」『四国

文学』一九六五・八

(4) 佃實夫「悦田喜和雄論ノートⅠ―その人と作品―」
前掲

(5) 悦田は若い頃の文学的影響について、「それは僕が文章世界に投書してゐた頃だ。先生(武者小路)のものが新潮や文章倶楽部に出てゐるのを見て、どこか別の世界へつれて行かれたやうに珍らしかつたものだ。そして先生を真似てもみた。」〔あの頃の僕の顔〕『文芸市場』一九二六・五)、「小生は説明ができないので、場面場面を写実的に書き、その場が重なることで、一つ概念を表現するというのが、若いときからの癖なので、それが読者に入れられないかと思うが、今さらどうしようもない。田山花袋や水野葉舟あたりの昔に得た文体……と、いいよいかと思います。(中略)葉舟の小品文というのを、其の頃よく勉強したのと、花袋の印象的に書くということが身につけてしまったのでしょう。」〔悦田喜和雄「感想」『四国文学』一九六二・一一)との回想を残している。

(とみつか まさき 徳島大学大学院社会産業

理工学研究部准教授)